



復興期は、
一、
二、
三、
四、
五、
六、
七、
八、
九、
十、

復興期

大震災以前の標榜は、どの方面に於ても、
改造の二字であつた。在来の制度、文物、習
慣の大概を昔時代的として根本的に改めよう
といふ希望が一般であつたが、これからはかくして
五年間は、何れも事業に「復興」といふ字の
詞が使用されるであらう。随つて何事の特等も此
語の持つ内容を自覚して創出するが當意を。

道徳

No.



改造も復興も、とらうも実務問題とをせよ
容易ではなけれど、改造は破壊と建設の二段が
成立つたに、仕事は復讐か。傳統とか因襲
とか、習慣とか、情愛とかいふものが、或は有形
の、或は无形の障害となつて改造の命運に攪
けらるゝものから、先づこれを破壊してあらうか
かぬ。さうしてそれから徹底的に破壊する、こゝは
革命か、外敵の力によらぬ以上、豫期がたぬ
の如通例か。ところが、~~破壊~~の破壊方には必ずし
もに種々の、相應に大きな餘弊が伴ふ。かゝる

No.

相馬屋製

れといふ形に由つて建設と早め得たとしても、理
想的な改造を實現することは容易でない。
それには、復興の場合には、仕事か、
単純か。復興といふものは、今度の場合が示す如く、
既に何等の力でも破壊が行はれたところを
示さざるを得ない。今度の天災は惨烈ではあつ
たが、改造の障害を防いである或種の物を除く
ためには頗る有利であつたといふ。又、~~天災~~が天
災力であつたに、一般に餘弊が少なかつた。
物質的にも精神的にも文化の中心であつた東

No.

相馬屋製

事業に物質的に供せ



物質的にも精神的にも文化の中心であつた東

は全人のモビラ・ラサとちつてしまつたが、**豊富**の**元氣**が旺盛であり、**経済**が立り、**文化**が働

費用としての**大分**、存分早く**徳**もあつた。が、以上の運動は疑問だ。**倉庫**安ちく**禮節**を知り、**衣食**を以つて**榮辱**を思

最近

風教様確たることである。バラン仕者中に**純粹**な**藝術**の**鑑賞**の**修養**が**長**た**レ**て**見**出

位を以て律し得られ。表面に於ては、公と私

相馬屋製

とを問はず、国體と個人とを誦せず、今度の
大破壊と様として嘗て豫期し得られやあつた
思ひ切つた改革が断行し得られやあつた
の。傳統や國體や情弊と英断するに非ず
様會があらう。當事者次第で復興即改造の實
を挙げ得らる。實利方面の事は、概して自覺と
奮勵と協力と一事物によつては私惠協同と一があ
れば成し得らるやうな。

相馬屋製

No.

みん點ぢけは、政治や経済や教育や其の
各方面の事情と敢て異なる所をなすや、文
藝の事は單に自覺や奮勵や協力や協同があ
ればなりては事功が挙らうない。殊に、憲制の如
き複雑な大がかりな綜合藝術とす。第一に
天才、第二に衆々の天才や能々の協力、第三に
對する社會の理解、同情、接應、いふ三大相
手が揃はなければ駄目な。ところで、此三相手は
尖前の、比較的餘力にも餘財にも富んでゐて、
各自の抱負も、中央首都に於て、
熾

相馬屋製

No.

ほんま有るやあつたとする。關西へ没落し
つある今日に於て、果して期待し得らるやあ
らうか？

二

若い文藝家の中にはやがて藝術の近い未來に飛し
て揮毫の光明ある理想と持つてゐる人達が多い。
民衆の眞の力を、眞の生命に、触れ、藉め、之
を機會として興るやうとす。宗教的な若く
は理想的な舞臺が起るやうとす。然るに、條
の、却る、此大破壊の奇のせしめ、條

相馬屋製

灰燼中から

は理想の如きもの、却て此大破壊の奇のせいで、
道制の如きもの、却て此大破壊の奇のせいで、

所感中

アビヤのスキスのやうに、若く美しく、
建てるから、
建てるから、

今後は、
今後は、

破壊する、
破壊する、

要に迫られて、
要に迫られて、

在来の制約と、
在来の制約と、

それら、
それら、

軌道構造も一変する、
軌道構造も一変する、

と、
と、

向の上にも、
向の上にも、

おぼさくでは、
おぼさくでは、

の变化、
の变化、

増利的に、
増利的に、

出す、
出す、

長する、
長する、

型、
型、

業の競進、
業の競進、

題目や、
題目や、

おもしろいもの、
おもしろいもの、

氣立つ、
氣立つ、

種、
種、

假若、
假若、

者、
者、

の、
の、

れ、
れ、

と、
と、

向の上にも、
向の上にも、

おぼさくでは、
おぼさくでは、

の变化、
の变化、

増利的に、
増利的に、

出す、
出す、

長する、
長する、

型、
型、

業の競進、
業の競進、

題目や、
題目や、

おもしろいもの、
おもしろいもの、

氣立つ、
氣立つ、

種、
種、

おもしろいもの、
おもしろいもの、

氣立つ、
氣立つ、

種、
種、

假若、
假若、

者、
者、

の、
の、

れ、
れ、

苗部、三枝、杉、竹等の、
苗部、三枝、杉、竹等の、

く扱はるゝに難くないわけにはゆくまい。或は一處に留まつてないで、各地方を巡察するといふ遊覧の方法を講ずることによつて、幸に働かれたり安んじられたりすることをまねがれたとする。而も尚ほほそれがわが國の爲に有利だとは信じかねる。最も此種の説は、何處に關しても、やつぱり中央に一種多量の地方の設備はまだ、概して低い。

相馬屋製

それだ、その核を以て連の東西興行の動機が、
十中七八まで、~~早~~時の生活上の便宜のためであ
らうから、~~尚~~近な意味での arch for living だの
あらうから、~~あ~~あらうから、い

三

私は、此際、既成藝術に依拠してゐるは、
その新展開も望み得らぬ、~~思~~思はない。古
い手法だが、せつぱり自然、~~定~~定する外に、~~土~~土方は
あつまい。が、~~新~~新構造を、野天式の昔に安し
ちう、~~新~~新装を、暗示的の備蓄に安しちう、

相馬屋製

脚本其物をギリヤ刺風にして、~~表~~表派派式に
して、~~新~~新風を、~~海~~海を去一切を象徴的にした
り、~~象~~象徴的にして、~~ち~~ちうすふんげで、~~つ~~つまり、目
先の一時的な改めたる止まつて、~~早~~早晩また元
の李阿子へ復せたいわけに、~~い~~いくまじり、
是非とも、~~能~~能く其意を、~~生~~生地、~~引~~引くから、~~ね~~ねはな
らぬ。いひかたは、~~も~~も一度改め、~~ア~~ア、~~チ~~チ、~~キ~~キ、~~ハ~~ハ、~~ニ~~ニ
に、~~頼~~頼る必要が起る。私が、~~大~~大災前に、~~レ~~レ、~~フ~~フ、~~エ~~エ、~~ト~~トと
~~主~~主、~~唱~~唱し、~~此~~此意を、~~書~~書い、~~ち~~ちうすふんげ、~~し~~し
たのも、~~異~~異意は、~~此~~此意味の、~~企~~企圖も、~~あ~~あつた、~~ち~~ちうすふんげ、
其目的は、~~新~~新風を、~~海~~海を去、~~は~~はあり、~~で~~で、~~ち~~ちうすふんげ、
No.

相馬屋製

唯の頼む所の

昨今の形勢は、~~私~~私として、~~ア~~ア、~~チ~~チ、~~キ~~キ、~~ハ~~ハ、~~ニ~~ニ、~~レ~~レ、~~フ~~フ、~~エ~~エ、~~ト~~トと、
~~し~~し、~~も~~も、~~寧~~寧ろ、~~悲~~悲觀的たる、~~あ~~あ、~~ま~~ま、~~と~~と、~~あ~~あ、~~る~~る、~~の~~の、~~何~~何故か、
~~唯~~唯一の、~~リ~~リ、~~ソ~~ソ、~~の~~の、~~長~~長、~~チ~~チ、~~ア~~ア、~~を~~を、~~持~~持、~~ち~~ちうすふんげ、
例の、~~實~~實、~~際~~際、~~第~~第一の、~~標~~標、~~語~~語、~~下~~下、~~に~~に、~~監~~監用し、~~盡~~盡さ、~~し~~して、
の、~~あ~~あ、~~ら~~ら、~~で~~で、~~あ~~あ、~~る~~る、

No.

昨今、~~催~~催される、~~當~~當、~~時~~時、~~は~~は、~~確~~確、~~定~~定、~~者~~者、~~懸~~懸、~~安~~安、~~を~~を、~~標~~標、~~榜~~榜、~~し~~し、
の、~~は~~は、~~一~~一、~~つ~~つ、~~も~~も、~~ない~~ない。、~~書~~書、~~門~~門、~~排~~排、~~優~~優、~~の~~の、~~そ~~そ、~~れ~~れ、
の、~~り~~り、~~も~~も、~~正~~正、~~當~~當、~~に~~に、~~ア~~ア、~~チ~~チ、~~ア~~ア、~~と~~と、~~呼~~呼、~~び~~び、~~得~~得、~~ら~~ら、~~る~~る、~~の~~の、~~向~~向、~~き~~き、~~の~~の、~~そ~~そ、~~れ~~れ、
甘、~~学~~学、~~校~~校、~~や~~や、~~小~~小、~~学~~学、~~校~~校、~~の~~の、~~そ~~そ、~~れ~~れ、
或は、~~首~~首、~~平~~平、~~家~~家、
No.

相馬屋製

甘学校や小島見きりらのみゆり
或は首書家 寄

寄稿者家のそれも 皆一齊に寄附義捐あり、
生硬であり、
粗笨であらうと

幼雅であらうと 拙劣であらうと 感謝を以て

批判され 是非せらるべきのでない。

之を觀賞する 大多数者は、斬るに會住の危言

や不安から 救済されて 僕等が 慰藉に飢えて

ぬる人々である。 飢者の會と擇ばないと同じ

程度に 彼等は 悪劣な 巧拙を 問はない。

程前に 斯ういふ 觀衆の 喝采が 傍外 藝家の 心境

には 面白くない 觀望を 與つて、 彼等の 藝が 益す

相馬屋製

一める 慮れがある。 ちやいど 地方 廻り たる 優

の藝が 下降する やるもの である。 それで 老練

の 藝は 劣る 藝は 劣る 藝は 劣る 藝は 劣る

元 藝に 戻す ことが 出来な い ことも ない が、 アマチュアの

やる 傍りの が 其 第一期 に 於て 善ん だらう と 駭目

だ。 アマチュアの 魅力は、 一に 熱心と 誠意とに

在る。 其 研鑽は 其 熱命的の 高聲 味に 在る。 だ

あら、 あれ まで 巧拙を 問は ないで、 やたらに 歡迎を

たり 喝采し たり する。 甘く 觀衆の 前に 立つて 其 初

演時代 から 虚栄心 を 満ち せしめ、 自ら スポイルす

相馬屋製

る は あり だ。 私 が 嘗て 初め の パーティ と 唱へ た 時 に、

お茶 氣 方の 嚴肅 化と 一に こと を 力説 して 遊戯 氣

分 や 茶番 或は 俄風 の 情調 を 絶對 に 排除 せよと

いつ た の は 是れ が 爲 であつ た が、 昨今 あちこち

で 傳へ る 茶番 氣 分 の うち に は、 一に 茶番 氣 分 の

丸 の が 芽 を 出 し 出 して あり ます。 バラック 興りの 藝

術 だ、 ちやいど、 ちやいど、 ちやいど、 ちやいど、

式 だ、 ちやいど、 ちやいど、 ちやいど、 ちやいど、

け ちやいど、 ちやいど、 ちやいど、 ちやいど、

相馬屋製

は あり だ。 私 は 是れ が 爲 に 未來 の 國 劇 術 の 大

尤。兄を教育が重要視される所以である。
刑の如きも、畢竟は、既成の人間にはあり依

相馬屋製

扱。とあるは、利益をどういふ生面、用いられ
にない。旧形派共におおは是らな。今尚
様事ある由に、これ出よ。とあるアマタア
とも、一。とある。悪字難解といふ説なりが感ん
ひあつて、とある。私にも、理子を懸けかねる。
幸、青氣や虚榮心は、とある。専門技藝、必しも素
人連中に餘計、障子。自惚も、増長も彼
等のけしに多い。二。成金は、香ばしくなり、
のどが、アマタアが、成金と、なるのは始末
にあつない。三。下を主張しては、見たり、

相馬屋製

私。私。既に絶望を、感。つ。た。あ。恐。ろ。未
事。の。唯。一。の。糧。は。家。庭。か。ら。出。発。す。兄。の。刑。務
刑。務。は。あ。ま。り。の。多。い。そ。り。か。わ。が。未。事。の。刑。の。最。も
清。快。な。種。類。と。な。る。の。は。あ。ま。り。の。多。い。
私。が。家。庭。に。お。け。る。兄。を。刑。を。主。唱。し。た。の。は、
一。面。教。育。の。ため。で。あ。つ。た。が、一。面。は。善。行。の
ため。で。あ。つ。た。何。れ。も、何。物。も、殊。に。容。易。く、
刑。務。に。得。ら。る。た。ら。ぬ。物。は、実。用。の。ため。或。は。悪。行。の。た
め。に、配。給。式。に。提。供。さ。れ。る。昨。今。で。あ。つ。た。見。事。と、
私。の。主。唱。を。思。ひ。刑。務。も、お。お。芽。を。あ。つ。た。ば、お

相馬屋製

り。と。あ。つ。た。は、お。お。す。ぐ。に。刑。務。に。持。ち。あ。つ。た。主
唱。者。の。期。待。と。裏。切。る。と。い。ふ。を。判。理。す。と。ス。ホ。イ。ル
る。か。解。ら。な。い。此。を。刑。務。に。持。ち。あ。つ。た。は、
さ。れ。る。物。と。い。ふ。刑。務。の。物。持。持。は、
事。も。後。に。お。お。な。ら。ぬ。や。に。な。る。も、
既に。家。庭。用。と。私。宣。つ。て。あ。つ。た。ら。ぬ。が、
兄。を。刑。は。本。來。は。公。道。す。ま。の。の。で。な。い。け。れ
ど、刑。務。に。持。ち。あ。つ。た。は、
や。あ。つ。た。刑。務。と。混。同。さ。れ。た。ら。ぬ。と、
を。解。さ。れ。る。處。が。あ。る。今。度、私。が、
刑。務。の。旧

相馬屋製

やき宿... 今度秋が、帯刺の旧

七期せ... 蘭西の近頃にお

樹け... 外ならぬ

私の... 要素を提

他の... 機会に譲

一言其要... 創性

終焉... 可能性を

遠出標紙や

相馬屋製

No.

この... 可能性

十二、十一月廿日稿

相馬屋製

No.

Blank grid area with a red arrow pointing left.

相馬屋製

No.



復興期藝術の開拓と豫測
坪内逍遙稿

本問文庫
文庫 14
A139



又三行 又十行 又十行

又十行

又十行

復興期は、
に編む録測
一三

道

大なる以、
の標は、
の方面に於ても

改造の二字であつた。
在事の制度、
文物、
習

慣の大概を、
背時代的として、
根本的に改めよう

といふ希望が、
一般であつたか、
これよりかくて

五十年間は、
何事の將來も此
詞が使用されることを

語の持つ内容を、
目録にして、
割出すのが當否を



No.



復興期藝術の開拓と豫測
坪内逍遙稿

本間文庫
文庫 14
A139





復興期藝術に關する豫測

